

自主的な受診は少ない 患者の“掘り起こし”必要

ウイルス性肝炎患者の掘り起こしや治療に向けて患者と医療機関の橋渡しをする肝炎医療コーディネーターのスキルアップや、地域連携の在り方を話し合う教育セミナーが大分市のJCOMホルトホール大分であった。

肝炎医療コーディネーターは、外来や健康診断の受診をきっかけとした検査、患者の相談、専門医へのあつせんなどをしていく。大分県は2011年から養成講座を開始し、医療機関、保健所、企業に勤める看護師や保健師を中心として約100人が活動している。

県内から医師やコーディネーターら約50人が参加。別府医療センターの酒井浩徳院長が院内でのC型肝炎摘。「地域のかかりつけ医の協力が欠かせない。現状を知ってもらうため、説明会を開くなどして専門医が地域に出向き啓発活動もしている」と話した。

課題や地域連携を議論

患者を確認する取り組みについて、同病院で検査を受けた約6500人のうち、陽性となった294人に医療機関の受診を促す通知を

グループワークでは、参加者から「陰性でもしっかり伝えるべきだ。コーディネーターと検査部門、担当医が連携して検査結果を確実に通知するシステムをつくってはどうか」「一生に一度だけの検査なので、職域や地域での健診会場で検査を促したい」などの意見が出た。

大分大学病院肝疾患相談センターの清家正隆診療教授は「患者は70歳以上が多



検査や治療を受けていない肝炎患者への対策を話し合う参加者

ウイルス性肝炎は血液などを介して肝炎ウイルスに感染することから起こる。放置すると肝硬変、肝がんへ進行する。B型の方がC型よりも感染力は強い。母子や集団生活での感染の危険性が指摘されている。特に1992年以前に輸血などの経験がある40歳以上の人は肝炎ウイルスに感染している可能性があるため、検査を受けることが望ましい。

く、高齢化も進んでいる。医療機関だけでなく、地域全体で患者を掘り起こす段階にきた。地域ごとに責任者となるコーディネーターを配置するなどして対応したい」と話した。

18日に家族向けの講演

肝臓病家族支援講座が18日午後2時から大分市のJCOMホルトホール大分3階大会議室である。入場無料。

B型肝炎訴訟や治療と仕事の両立支援、症状別の食事のポイントについて、弁護士や大分労働局の担当者、管理栄養士らが講演する。個別の相談会も心じる。

問い合わせは肝疾患相談センター（☎097・5886・5504）まで。